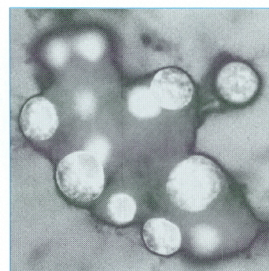


## ポスト・パパニコロウの時代

坂本穆彦<sup>1)</sup>



細胞診とパパニコロウとは切っても切れない縁で強く結ばれてきました。何よりも、Papanicolaou 自身は細胞診の創始者とされており、氏の考察によるとされるパパニコロウ染色は染色法のスタンダードとして種々の変法を交えつつも今日なお広く用いられています。さらにパパニコロウ・クラス分類はわが国では津々浦々まで浸透し、日常診療に定着しております。細胞診の判定報告書にこのクラス分類を記載する欄が印刷していない施設を探すことはなかなか難しいものと思われまふ。

細胞診を語るキーワードとしてはスクリーニングも外せません。病変、特に癌の有無をチェックする簡便な検査手法としての面が、細胞診普及の根底にあったことは間違いないと思われまふ。癌検診における細胞診の貢献は細胞診の意義を語るうえでの重要なポイントであり、ここではスクリーニングとしての機能が十二分に評価されてきました。

しかしながら、今日の細胞診を俯瞰してみるとパパニコロウとスクリーニングを軸に細胞診を語ろうとしても語りつくせない部分があちこちに出現していることに気づかされます。

パパニコロウ染色はさておくとしても、クラス分類はわが国以外では現在では用いられない分類となつてしまいました。その是非はこの欄では論じませんが、日常の判定にこの分類を用いているわが国は、この面では国際的例外となっています。パパニコロウ染色でさえもこれを標準的染色法として用いていない国や施設もあります。

細胞診とスクリーニングの関係にしても、穿刺吸引細胞診の導入は、それまでの細胞診の診断学的評価に重大な変更を迫りました。今日では、穿刺吸引細胞診の判定結果には組織診と同等の診断的意義が認められる領域も出てきました。細胞診イコール・スクリーニングという時代はもはや過ぎ去りました。細胞診は今世紀初頭から、臨床的に有用な診断手法として徐々に広がりをみせ、今日に至っています。しかしながら、既に述べたいくつかの事項からも明らかのように、われわれは“ポスト・パパニコロウの時代”を意識的に構成せねばならない時期にさしかかっていると思われまふ。いいかえまふと、細胞診はパパニコロウの“呪縛”から解放放たれることによってさらなる進展を展望することが求められているのではないのでしょうか。

ところで21世紀を迎えるに当たり、世の中のさまざまな分野において、これまでの足跡の回顧と総括が行われ、それをもとに新しいステップへの構築を目指すという作業が試みられています。その意味でも「臨床検査」臨時増刊号のテーマとして細胞診を取り上げることは細胞診に携わる者としては、まこと

1) SAKAMOTO Atsuhiko 杏林大学医学部病理学・教授

に時宜を得た企画であると感じています。これを機会に、細胞診を専門とする多くの方々にそれぞれの立場で現状を解析していただき、将来の予測や展望をうかがうことができますのは極めて意義深いものと考えます。このような時代の流れを背景に意識しつつ、本増刊号は構成されております。

今日においては、細胞診に関するテキストや教本は多数刊行されています。それらを拝見すると、いずれも標準的な教科書的記載を心がけたものとなっています。このようななかで、本増刊号は既刊の書とはいささか異なる編集方針を取っています。すなわち、細胞診の各分野で現在問題となっている事項について焦点を当て、それらについての現状分析と将来展望を提示することに主眼を置きました。

第1, 2章では一般社会・医療界での細胞診の役割、位置づけを見直し、今後、細胞診はどのように展開されると予想されるか、ないしはどのように展開されることが望ましいかについての将来像が語られます。

第3, 4章は実地医療に直接関連した領域で、細胞診業務に当たる部分です。第3章は標本作製までの技術面を、第4章では判定の実際を取り上げます。ここでも細胞診の全領域に立ち入るわけではなく、現状で注目を集めている項目に意図的にスポットを当てています。特に判定の実際では現状の診断学的な限界が明示され、その限界を突破すべき方法に関する営為と、それに基づく展望が主に述べられます。

第5章ではニュー・テクノロジーなどの細胞診への応用が述べられます。パニコロウ染色標本による判定の限界を突き破る手法がこれらに内包されているのか、あるいはこれらでまだ無理なのかが示される興味深い章となっているはずです。

以上の本書での理解を助けるために“一口メモ”および“ミニレビュー”欄を随所に設けました。“一口メモ”では各領域からのピック・アップされた疾患や所見に概説が加えられます。細胞診での判定の難しいものや、新しい疾患単位なども含まれていて内容は多岐にわたっています。これらと細胞診とがどのような関係にあるのかについても触れられます。“ミニレビュー”では今日の腫瘍学を理解するには必要不可欠ないくつかの生物学的・基礎医学的事項を取り上げてあります。これらの中には現時点では直接に細胞診の日常業務には結びつかないものも含まれていますが、個々の病態、特に腫瘍性病変を考察してゆく際には常識として身につけておくべき項目であると考えられます。

以上のように、本増刊号はいささか盛り沢山の内容と期待を込めて企画されております。読者諸賢が本書を細胞診の将来を考えるうえでの指針としていただければこれにまさる喜びはありません。